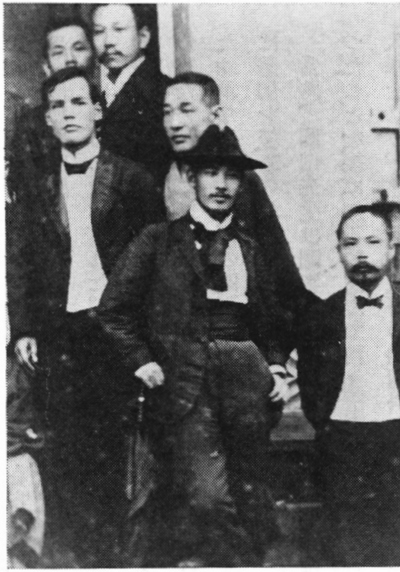


あつた。今月は運動會や何かで多忙であつたため、未だ催されないが、爾後は益々盛んに談論の練習をして、其の不自由のない様にするつもりである、此の二點は確かに他のクラスと異なる點である事を信ずる。猶其の他に御知らせ申すべき事は多いが、大切の紙面を塞ぐから餘は次號に譲る。(本二某生)

関連事項

① 岡田三郎助帰国

明治三十五年一月二日(「東京美術学校旧職員履歴書」による)、岡田三郎助がフランス留学を了えて帰国した。岡田は黒田清輝、久米桂一郎と同様にラファエル・コランのもとで洋画研究を続け、その傍ら装飾術についても学び、ベルギー、南仏、イタリア、イギリス等を旅行したのち帰国したのであった。滞欧作のうち「セーヌ河上流の景」、ホルバイン作「カンタベリー大司教ウイリアム・ウォーラ



帰国早々の岡田三郎助(中央)
明治35年7月卒業記念写真より。

ム像」模写、レンブラント作「自画像」模写等が本校に収蔵された。

岡田は帰国の翌月に囑託教師として本校に復帰し、西洋画授業を週二日担当。翌三月五日から仮入学生の本炭画授業担当に転じ、同年十二月五日に教授に昇格して図案科の絵画授業を暫く担当する。

『美術新報』第一巻第五号(明治三十五年五月二十日)には岡田の談話「図案に就て」が掲載されているが、これによって彼が図案に対して並々ならぬ関心を寄せていたことと、図案の革新に関する考えの一端を窺うことができる。なお、帰国して間もない頃の岡田については、教え子たちが次のように述べている。

「上略」明治三十五年四月、私は東京美術学校の假入學と云ふのへ這入つた。當時本入學は七月であつたが、其れ迄の數ヶ月を、希望者には此假入學に於て日本畫、木炭畫、塑造の三種目に就いて初步的指導を受ける事が許された。此の時の木炭畫の先生は、文部省の海外留學生として佛蘭西滞在から歸朝せられたばかりの岡田先生が受持たれた。地方の中學を卒業した儘の私には岡田三郎助と云ふ名前は無論初めて知るので、何んな繪を描く人かなど全く知る處は無かつた。恐らく西洋畫家で其迄に私が少しでも知つて居たのは黒田清輝と云ふ名前位のもので有つたであらうか。

岡田先生が初めて教室に來られた時、其の白哲美髯、態度明快、ギユウ／＼音がする様な羽織袴の風貌は、私が今迄懐いて居た「先生」形概念から甚だ異つたもので、薄汚い教室の背景と

は遠く相反する光景で有つた。明るさと和らかさが教室に溢れるやうに私には感ぜられた。

實に熱心に教へられた。前述の如く、此假入學の生徒は、何れの科に入る者も一緒になつて居たので、他科に入る者の中には木炭畫など疎かになり勝ちの者、又た箸にも棒にも懸からぬと云つた幼稚な者でも、何の區別も無く自ら手を取つて教導せられる事に懇切を極められた。

當時、岡田先生は圖案科の教授であつて西洋畫科の教授で無かつたことを後に知るに及んで稍々——意外の感がした。それが假入學を終り、愈々西洋畫科の豫備科の生徒になつた時には岡田先生の教から離れる事になつたので甚だ淋しく感じた。(岡田先生が西洋畫科の教授に轉ぜられたのは私が卒業後の事である)〔下略〕

〔三の橋時代、帰朝當時の岡田先生〕南薰造『画人岡田三郎助』昭和十七年。春鳥会)

〔上略〕予が先生を師と仰いだ初めは、明治三十五年、先生が西洋から御歸朝された直後、美校圖案科の洋畫教授の任に當られた時であつて、爾來三十何年間の久しい間に互り、公に、私に、畫に、工藝に教を乞ふ期に恵まれたのであつた。御歸朝當時學生等は此の新知識の先生を迎へて洋畫はもとより工藝圖案の御指導にまでも大いに期待をかけたが、當時の圖案科は日本趣味の旺盛な時代であつたが爲めに、先生の趣味蘊蓄も死蔵の止むなきに至つたことは、今日から想ふと洵に迷惑至極なことであつた。予は

洋畫家にならうとは思はなかつたので、其の方面には餘り熱心ではなかつたが、それにも拘らず先生は懇切丁寧に教導せられ其時に描いて頂いた御手本は今に大切に收藏して居り之を観ることに慚愧に堪へない、先生の御性格は洵に温厚であり、人に對して障壁を設けず言語も態度も一視同仁の趣があり、アトリエへ侵入した夜盜と平氣で閑談を交はされたことなどは有名なことである。洋畫専攻の學生等に對する教授振りの委しいことは知らないが、圖案科生徒等に向つては其の習作を一々入念に吟味され、如何なる拙作に向つても決して之れは駄目だ、遣り直さんければ、などと言はれたことはなく先生自づから筆を執られ、惡い點を丁寧に直されるといふ風であつたから、生徒からの信望も厚く、恰かも慈母の如くであつた。

〔追想の二三〕小場恒吉。同右)

② 浅井忠帰国

明治三十五年八月二十一日〔東京美術学校旧職員履歴書〕による、浅井忠がフランス留学を了えて帰国した。しかし、浅井は本校へ復帰せず、同年九月十一日に京都高等工芸学校の教授となり、京都に移住したので、留学の成果は直接本校を利することにはならなかつた。転任の事情については正木直彦が次のように記している。

然るに、白馬會の一派が美術學校へ入つて洋畫の教授になつたのに對して、これと對立してゐた明治繪畫會〔美術〕から、

『自分の方にも美術學校に一つ教室を持たなくてはならん！』